山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要第14号（2002.7）

中学生の情報活用能力の育成を図る授業実践

井上　史子・林　　徳治

The Practice for Cultivating Junior High School Pupils Media Literacy

INOUE Fumiko, HAYASHI Tokuji
(Received May 15, 2002)

キーワード：映像教材　情報活用能力　中学生　総合的な学習の時間

1．はじめに

高度情報通信社会と呼ばれる今日、我々は従来のテレビやラジオに加え、インターネットなどさまざまなメディア*1を通し、膨大な量の情報を入手できるようになっている。

このような社会に生きる子どもたちにとって、情報手段を適切に活用して溢れる情報の中から必要な情報を選択し、自ら主体的に情報発信する能力は不可欠であると考える。

筆者が勤務する地域の小・中学校でも、今年度より導入された総合的な学習の時間などを使い、子どもたちの情報活用能力を育成するための授業が行われているが、しかしその実践の中には情報通信手段を利用すること自体が目的化しているような、機器操作技術の習得だけに偏った授業も多く見受けられる。

情報教育の目標は、情報活用能力*2（情報活用の実践力・情報の科学的理解・情報社会に参画する態度）の育成にあるが、教師はその内容をよく認識しそれぞれを偏ることなく系統的・計画的に育成するという視点が必要である。

本稿では、筆者が勤務する中学校において2001年度に実践した総合的な学習の時間における情報活用能力を育成する授業の概要を報告するとともに、事前・事後調査の結果より本実践授業の成果と課題について考察した。

2．本研究の目的

本研究は、中学生の情報活用能力を育成するための授業において映像教材の効果的な利用方法を提案し、授業改善に役立てることを目的とした。

3．本研究課題を設定した理由

本研究を実施するにいたった理由は、筆者が近年の中学生について課題追求の意欲の乏しさや、現実感の希薄さといったものを感じていたことにあった。

＊1　ここでいうメディアとはテレビやラジオ、電話などの情報伝達媒体としての機器を指す。
＊2　情報化の進展に対応した初等中等教育における情報教育の進展等に関する調査研究協力者会議、第一次報告、『体系的な情報教育の実施に向けて』、1997

筆者はその要因の一つとして、子どもたちが吟味する間もなく一方的にテレビなどのメディアから流れ出る情報に長時間さらされていること、また、視聴者をひきつけるように編集されているテレビ番組の実態が一般には知らされていないことにあると考え、中学生のメディア利用の実態について知るためアンケート調査を実施した*3。

3－1．アンケートの概要と調査結果

図3-1-1～図3-1-6にアンケート結果*4を示す。

本アンケートは本校1年生(125名)を対象に行った。調査対象学年の選定は、2001年度本校で総合的な学習の時間が試験的に導入されていたのが1学年だけであったこと、1学年の総合的な学習の時間のテーマが“情報活用能力の向上”であったこと、筆者が所属する学年であり実態把握が容易であったことなどの理由による。

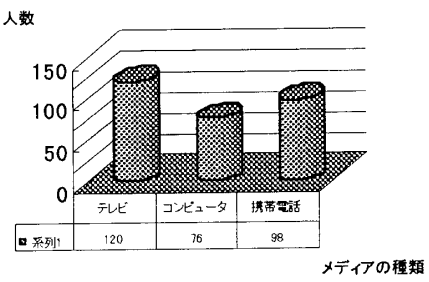

図3-1-1 メディアの普及状況

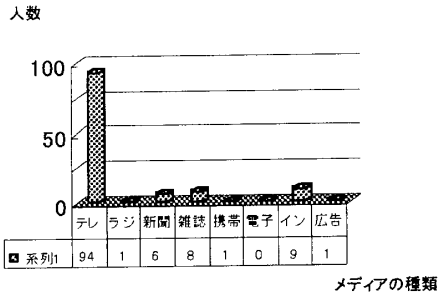

図3-1-2 生徒の情報源としてのメディア

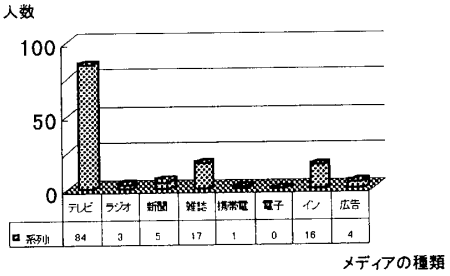

図3-1-3 生徒が影響を受けているメディア

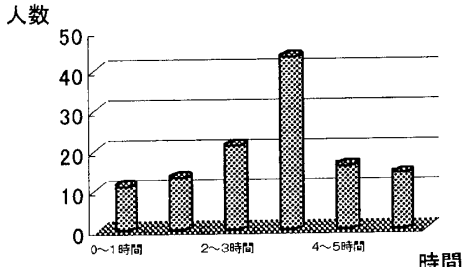

図3-1-4 テレビ視聴の時間

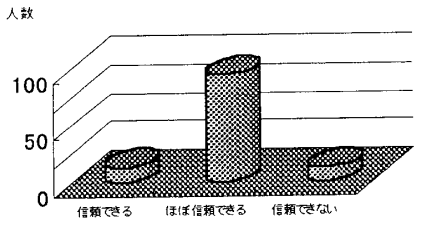

図3-1-5 生徒のテレビ番組に対する信頼感

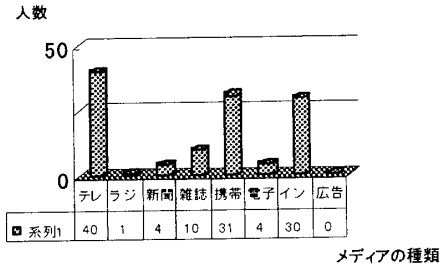

図3-1-6 生徒が興味を持っているメディア

＊3　本文末にアンケート用紙を付録として掲載した。

＊4　図3-1-2・3・6で省略されている各メディア名を示す。
「テレ：テレビ」、「ラジ：ラジオ」、「携帯：携帯電話」、「電子：電子メール」、「イン：インターネット」

本アンケート調査の結果から、対象とした生徒の、①前家庭にテレビがあること、②77.1%*5がテレビから情報を得ていること、③70.0%がテレビ映像に影響を受けていること、④一日のテレビ視聴時間で最も多いものが3～4時間であること、⑤90.0%がテレビ番組の内容を信頼していること、⑥33.3%がメディアとしてのテレビに興味を持っていることなどが明らかとなった。

つまり、テレビは調査した生徒にとって最も身近なメディアであり多くの生徒がテレビから情報を得たり影響を受けたりしているにもかかわらず、その情報の信憑性についてあまり疑問を感じていないことなどがわかった。

以上のことから、情報を鵜呑みにせず慎重に吟味しようとする態度を育成するために、生徒が映像制作の実態について気づく授業を設定した。

4．映像教材を活用した授業

授業の流れ（全11時間）を図4-1に示す。

本授業は総合的な学習の時間を利用し、本校生徒が出演した民放テレビ番組*6の視聴および「取材（事実）－編集－報道」の制作過程の体験を通じ、的確に事実が報道されているかを検証した。そして事実と報道とのくいちがいを見つけ、改善したビデオ教材を制作し、その後本実践がテレビ番組視聴の態度に及ぼす影響について考察した。

導　入	各自が新聞を読み、事件や事故などに対する報道の仕方への感想を書き、発表する。 《事前調査実施》
分析1	テレビ番組『はつらつ山口っ子』を視聴し、構成や制作者の意図などについて話し合う。
分析2	番組の内容を実生活と比較し、相違する部分と一致する部分を抽出する。
検　証	分析2で抽出した内容について検証する。
再構成	ビデオ『はつらつ山口っ子』（宮野中版）の制作を行う。
評　価	自分達で制作したビデオを視聴し、相互評価を行う。 《事後調査実施》

図4-1　実践授業の流れ

本番組は、地域の学校や教育関係機関および団体を取材し、子どもたちを取り巻く社会や教育の現状を報道する番組である。

＊5　小数点以下第1位まで算出、第2位以下は四捨五入。以降の計算についても同様。
＊6　山口放送　『はつらつ山口っ子』　2001年10月放送

4－1．授業の概要

（1）総授業数：総合的な学習の時間　　全11時間

（2）対　　象：本校1年生の総合的な学習の時間のテーマは情報活用能力の向上であり、指導はグループ別に行っている。グループは“身体を使ったコミュニケーショングループ”、“文字と言葉を使ったコミュニケーショングループ”、“メディアを使ったコミュニケーショングループ”の3つに分けられており、筆者はそのうちのメディアを使ったコミュニケーショングループ（15名）を担当した。本実践はこの15名の生徒を対象に実施したものである。

（3）内容と方法：授業内容と方法およびそれぞれの内容に対応した情報教育のねらいを図4-2に示す。

活動		時間	内容	情報教育のねらい[1] *7
導入		2時間	◎新聞から興味・関心のある記事を抽出する。 ◎記事の「書き方」について感じたことを原稿用紙1枚程度にまとめる。 ◎まとめた文章を一人ずつ発表する。 ◎事前調査の実施	◇メディアから情報を集める（Level 2） ◇伝えたいことを整理して章にまとめる(Level 2) ◇伝えるために資料を見ながら話す(Level 2)
展開	STEP 1	1時間	◎テレビ番組『はつらつ山口っ子』を視聴する。 ◎番組の制作意図、構成内容、効果についてまとめる。 ◎まとめたことを発表し合う。	◇身近なことから課題をみつけ、問題解決のために情報を収集する(Level 3) ◇集めた情報について話し合い、新しい関係をみつける(Level 2) △他の人の情報をもとに自分の情報を改善できる(Level 3)
	STEP 2	1時間	◎視聴したテレビ番組の内容と実生活の様子を比較する。 ◎相違した部分と一致した部分を抽出する。 相違した部分についてなぜ違うのかについて話し合う。	◇他の情報と比較しながら必要な情報を得る(Level 3) ◇集めた情報を分析し、傾向や規則性を見つける(Level 3)

図4-2　授業内容・方法・ねらい

＊7　永野和男、『情報教育の目標リスト』、火曜の会メールマガジン41、42号
◇；情報活用の実践力　☆；情報の科学的理解　△；情報社会に参画する態度
Level 2；小学校中学年程度　Level3；小学校高学年程度　Level4；中学校程度以上

活動		時間	内容	情報教育のねらい
展開	STEP 3	1時間	◎前時に抽出した内容について、グループで調べる。 ◎他の友達や先生に意見を聞く。 ◎調べた内容や意見をまとめる。	◇目的を考え、情報を選択して集める(Level 3) ◇話し合って意見をまとめる(Level 2)
	STEP 4	4時間	◎ビデオ教材制作を行う。 ＊脚本作り・絵コンテ作り・役割分担・撮影計画・編集計画	◇相手を意識し、推敲を繰り返して発信する(Level 4) ☆表現したい事物を効果的に写真やビデオに撮影する(Level 2) ☆文字や映像や音声を編集する(Level 3)
まとめ	相互評価	2時間	◎各グループが制作したビデオを視聴する。 ◎ビデオの良い点・悪い点について相互評価をする。	△他の人の発信した情報の良いところを見つける(Level 2) △情報には発信者の意図が含まれていることに気づく(Level 3) △相手の気持ちを考えて自分の意見を表現する(Level 2)
	自己評価	1時間	◎学習した感想をまとめ、自己評価をする。 ◎事後調査の実施	◇情報には送り手と受け手があることに気づく(Level 2) △情報には発信者の意図が含まれていることに気づく(Level 3) △受け取った情報が正しい情報かどうかを意識できる(Level 3)

図4-2　授業内容・方法・ねらい

（4）アンケート調査：本実践の対象である15名の生徒および予備調査として無作為に抽出した生徒23名（1年生）に実施した事前・事後調査の質問項目を以下に示す。(記名、「思う・やや思う・思わない」、質問⑥は(「あった・ややあった・ない」で回答)

①「テレビ番組が伝えることは信頼できる」
②「テレビ番組の出演者は演技をしている」
③「テレビ番組の制作者は事実を伝えている」
④「テレビ番組は作られた世界である」
⑤「事実は人の立場や考えによって変わるものである」
⑥「テレビ番組の視聴後とビデオ教材制作の学習後で、テレビをみる態度に変化はありましたか」

4－2．調査結果の報告と考察

本実践の対象である15名の生徒の事前・事後調査の結果を以下に示す。

尚、「思う・やや思う」（質問⑥は「あった・ややあった」）を同一カテゴリーとして割合を算出した。

＜質問①＞『テレビ番組が伝えることは信頼できる』

表4-1　テレビ番組からの情報に対する信頼度

	思う	やや思う	思わない	信頼していない割合
学習前	１名	１１名	３名	２０．０％
学習後	０名	６名	９名	６０．０％

＊　学習前に「思う」と答えた生徒は授業後「ややそう思う」に変化している。この生徒は、学習前に特にテレビ番組について関心を持っていなかったが、自由記述の内容より学習後はテレビ番組を気をつけてみるという考えに変容している。

＜質問②＞『テレビ番組の出演者は演技をしている』

表4-2　テレビ番組出演者の演技に対する信頼度

	思う	やや思う	思わない	信頼していない割合
学習前	１０名	５名	０名	６６．７％
学習後	１４名	１名	０名	９３．３％

＊　生徒の３分の２は、学習前からテレビ出演者は演技をしていると考えているが、学習後は自身が出演者という立場を経験したためか、15名中14名の生徒が出演者は演技をしていると考えるようになっている。

＜質問③＞『テレビ番組の制作者は事実を伝えている』

表4-3　テレビ番組制作者の情報伝達に対する信頼度

	思う	やや思う	思わない	信頼していない割合
学習前	１名	６名	８名	５３．３％
学習後	２名	１０名	３名	２０．０％

＊　この質問では、テレビ番組の制作者を信頼していない割合が低下している。これは自由記述の内容より、ビデオ教材制作の難しさを経験して番組制作者に対して好意的な態度に変容した生徒が多かったこと、事実を伝えても視聴者の見方で番組に対する印象が違うことに気づいた生徒が多かったこと（設問⑤の結果より）などに要因があると考えられる。

＜質問④＞『テレビ番組は作られた世界である』

表4-4　テレビ番組の内容に対する信頼度

	思う	やや思う	思わない	信頼していない割合
学習前	４名	８名	３名	８０．０％
学習後	８名	７名	０名	１００．０％

＊　ビデオ教材制作を体験したことによりテレビ番組には制作者の意図が反映されているということにすべての生徒が気づいたと考えられる。

＜質問⑤＞『事実は見る人の立場や考えによって変わるものである』

表4-5　　ものの見方の違いに気づいた生徒の割合

	思う	やや思う	思わない	視点の多様さに気付いている割合
学習前	８名	４名	３名	８０．０％
学習後	７名	７名	１名	９３．３％

＊　５分の４の生徒は学習前から人によってものの見方が違うことに気づいているが、同じテーマでビデオ教材制作を行ってもさまざまな作品が出来たことにより、15名中14名の生徒がものの見方の違いに気づいたと考えられる。

＜質問⑥＞『テレビ番組の視聴後とビデオ教材制作の学習後で、テレビをみる態度に変化はありましたか』

表4-6　　テレビ番組視聴の態度の変容

	思う	やや思う	思わない	変容した割合
学習前	２名	３名	１０名	３３．０％
学習後	６名	７名	２名	８６．６％

＊　テレビ番組視聴だけでは態度変容がなかった生徒もビデオ教材制作の体験後、視聴態度に変容が見られる。学習後に態度変容しなかった２名は学習前よりテレビ番組に対して懐疑的であった生徒である。

表4-7は、どのような態度変容があったかについて生徒の自由記述の中から主なものを選び、「テレビ番組に対して批判的*8・懐疑的・肯定的」の３つの観点からカテゴリー分類したものである。

表4-7　学習後の視聴態度の変容について

観　点	生　徒　の　記　述	同類回答数
批判的	○どれもうそであると思うようになった。 ○撮影した映像はそのまま放映されず、その人が伝えたい内容に編集されているんだなと思うようになった。 ○撮影は放送されている映像通りの順番に撮るのではないことがわかり、そんな風にテレビを見るようになった。	6
懐疑的	○時々、本当かなあと思うようになった。	1
肯定的	○番組を作る苦労がわかるようになった。 ○今までテレビ番組のしくみを悪く考えていたが、大変さがわかり言わなくなった。 ○テレビ局の人はすごいなと思うようになった。 ○うそっぽくなるのも仕方ないと思うようになった。	6

＊８　ここでいう批判的とは『情報を正しく認識し、理解するために、視聴覚から得る情報をより的確に捉え判断できるための能力』[2]が見られる状態、懐疑的とは、疑わしく感じてはいるが情報を的確に捉え判断することは出来ていない状態、肯定的とは、映像制作の実態を知ることで逆に内容の是非に関係なくテレビ番組を信頼するようになった状態を指す。

表4-7より、テレビ番組に対して批判的に見るようになった生徒と肯定的になった生徒は同数であった。記述の内容を見ると肯定的になった生徒の多くは映像制作の技術的な面に視点が向いてしまい、番組内容や制作者の意図にまで思考を発展させることが出来ていない。しかし、批判的に見るようになった生徒の中にもテレビ番組から得られる情報がすべてうそであるというようにメディアを全面的に否定するような意見も見られた。これは教師が映像の作られた部分を強調し過ぎたためではないかと推察される。

次に予備調査の結果を表4-8に示す。

これは、ビデオ教材制作を体験していない生徒23名*9に本実践で使用したテレビ番組を視聴させた後、同様の調査を行ったものである。

表4-8　未体験グループの視聴態度の変容

	変容した	変容しなかった	変容した割合
ビデオ教材製作 未体験グループ	５名	１８名	２１．７％

表4-8より、ビデオ教材制作を体験していないグループでは23名中18名の生徒に視聴態度の変容が見られなかった。ビデオ教材制作を体験したグループでもテレビ番組の視聴だけでは15名中10名の生徒に態度の変容が見られなかったことから、テレビ番組の視聴だけでなくビデオ教材制作を組み合わせることが視聴態度の変容に何らかの影響を及ぼす傾向があるということが推察された。

５．今後の課題

本授業では、ビデオ教材制作を実施したが、その理由は筆者の経験より文字教材よりも視聴覚教材の方が生徒の興味・関心を高めるのに有効であること、視聴覚教材の中でも動きや音声を伴う映像は言語理解力の未熟な生徒の理解を助け、発達の個人差が大きな中学生に適していると思われること、生徒たちが最もよく情報供給源として利用しているテレビ映像の仕組みなどについて理解することは批判的な視聴者となるために不可欠であると考えたからである。

しかし、①ビデオ教材制作が中学生の情報活用能力の育成に適した教材であるという実証は本実践だけでは不十分でありさらに研究を深める必要がある、②映像の理解が他の視聴覚教材の理解につながるかどうか明確でない、③本校の生徒が出演している民放テレビ番組を使用したため、普遍的でないなどの課題が考えられる。

また、信頼できる実践結果を出すには、サンプル（標本）とする対象や分析方法について厳密に考慮する必要があることや、映像制作を利用した授業に誰でも取り組めるようにするためには映像制作の手順や機器のマニュアル化が必要であることなどが、本実践より明らかになった。

映像が今後ますます我々の生活に身近なものとなり、言語や文字以上に情報伝達媒体と

＊９　予備調査対象である23名はメデイアを使ったコミュニケーショングループ以外のグループの生徒であり、また筆者の学級の生徒でもあるので調査が容易なことから選択した。

して占める割合が増加することが予測される現代、学校教育において映像を活用した情報教育を進めることの必要性は高まると思われる。

筆者は本実践で得た知見をもとに、映像教材を活用した情報活用能力の育成を図る授業について継続して取り組みたい。

【引用文献】

［1］永野和男、『情報教育の目標リスト』、火曜の会メールマガジン41、42号

［2］井上史子、「3.2.1　クリティカルな視聴能力の育成をめざした授業－テレビ番組『はつらつ山口っ子』で学ぶ－」
林　徳治・宮田　仁、『情報教育の理論と実践』、実教出版、2002、p.58～63

【参考文献】

1　情報化の進展に対応した初等中等教育における情報教育の進展等に関する調査研究協力者会議、第一次報告、『体系的な情報教育の実施に向けて』、1997

2　NHK放送文化研究所、「2000年国民生活時間調査」

3　（株）ビデオリサーチネットコム、「インターネット普及状況調査（2001年9月度調査）」

4　大岩　元、橘孝　博、半田　亨、久野　靖、辰巳丈夫　共著、『情報科教育法』、オーム社、2001

5　佐々木輝美、『メディアと暴力』、勁草書房、1996

6　菅谷明子、『メディア・リテラシー』、岩波新書、2000

7　佐藤　信、『推計学のすすめ』、BLUE BACKS ,1977　第17刷発行

8　沖　裕貴、『仮想現実と子どもたちの心』、久美株式会社、2000

付録　メディア利用の実態に関するアンケート用紙

＊あてはまるものに○をつけてください。

1．性別は　　男（　　）　　女（　　）

＊あてはまるものに○をつけてください。

1．あなたが最も多く情報をえるメディアはどれですか。

テレビ（　）　ラジオ（　）　新聞（　）　雑誌＜漫画本を含む＞（　）

広告紙（　）　携帯電話（　）　インターネット（　）　電子メール（　）

2．あなたが最も影響を受けるメディアはどれですか。

テレビ（　）　ラジオ（　）　新聞（　）　雑誌＜漫画本を含む＞（　）

広告紙（　）　携帯電話（　）　インターネット（　）　電子メール（　）

3．あなたが最も興味のあるメディアはどれですか。

テレビ（　）　ラジオ（　）　新聞（　）　雑誌＜漫画本を含む＞（　）

広告紙（　）　携帯電話（　）　インターネット（　）　電子メール（　）

4．次の機器のうち、あなたの家にあるもの（自分のもの以外も含めて）にすべて○をつけてください。

テレビ（　）　携帯電話（　）　パソコン（　）

5．テレビに関する以下の質問について答えてください。

① あなたは1日平均して何時間程度、テレビをみますか。あてはまるものに○をつけてください。

1時間以下（　）　1～2時間（　）　2～3時間（　）

3～4悲観（　）　4～5時間（　）　5時間以上（　）

② あなたはテレビ番組の内容は信頼できると思いますか。あてはまるものに○をつけ、その理由もこたえてください。

できる（　）　ほぼできる（　）　できない（　）

理由；